

■体験版■

俺の部屋のベッドでミニスカートからパンツを覗かせて俺のマンガを読み耽っている幼馴染みの○○○を使わせて貰うのは、所謂ギブアンドテイクというヤツだろっ？

なつめ なつめ

夏目 棗

□ □ 注意事項 □ □

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 溝口 乃の加(みぞぐち ののか) || 私立聖水(きよみず)学院二回生。

身長 .. 162 cm、体重 .. 49 kg、スリーサイズ .. 84 (Cカップ) ・ 47 ・ 87。

本人は冗談だと思っているようだが、何故か聖水学院の美少女ベスト5にランクインしている……らしい。



● 立川 侑二(たちかわ ゆうじ) || 私立聖水(きよみず)学院二回生。

乃の加の幼馴染み。恋人関係ではないし、恋愛感情も持っていないようだ。にも拘らずエッチはほぼ毎日のように普通にする間柄。でもセフレとも違うようだ。



「侑二い、このマンガの続き〜♪」

俺の部屋のベッドに寝転がって、俺のマンガを読み耽り、あまつさえ、俺に続きを持ってこいと言いつつ、このふてぶてしい女は……隣の家に住んでいる生まれた時から幼馴染みの溝口乃の加(みぞぐちののか)だ。

このズボラでふてぶてしい女は、実は俺たちの私立聖水(きよみず)学院では五本の指に入る美少女……らしい。いや、俺は認めて居ないが。

それに、学院では猫を被っているから(俺以外)誰も本当のこの女のズボラでふてぶてしい姿を知らないのだ。

「ほらよ……」

俺は生まれながらの「優しさ」と「寛大さ」から、俯せに寝転がった乃の加の頭の横に続きを四、五冊置いてやる。(この『四、五冊』ってトコが実はミソで……いやだって途中で『続きは?』とか言われるの、嫌だろ? ↑えつ、意味不明? まあ、おいおい、な……)

「ありがと……」

一方、乃の加はそれだけ言って続きを読み始めた。

その彼女の下半身に目を遣ると、偶然だろうが（？）短いスカートが摺りあがっていてピンクのショーツが見えていた。

だから俺は幼馴染みとして一つ苦言を呈した。

「そのスカートは短すぎるぞっ！」

「ええっつ？……そうかなあつ？」

乃の加はマンガから目も外さずに答え、思いついたように続けた。

「……あ、でも大丈夫……これ、ウチでしか穿かないから……」

「いや、ここはお前の“ウチ”じゃないしい！」

「あつ、ホントだつ……うくくっ♪」

最後の『うくくっ♪』は返事が的を射ていたのか、マンガが面白かったのか、よく判らなかつた。

しかも、自分の部屋に居るかのよう完璧に寛いでいる（いつもの事だが）ので股下はかなりだらしなく緩んでいて、ショーツのクロッチ部まで丸見えだ。

俺は、じつくり、と飽きるまで視姦してから乃の加に感想を伝えた。

「今日のパンツさあ……色も可愛いし、小さいのもイイし、サイドが紐なものエッ

チいし、食い込み具合もエロエロでえ……うん、実にイイぞっ♪」

「ホントにいい、ありがとう♥」

乃の加はこつちを振り返りもしないで嬉しそうに答えた。そして、マンガを読み続けながらついでのように言った。

「でも、侑二い……触って良いなんて、言っていないからっ！」

少し怒ったように言うが、それもいつものコトだ。

勿論、生まれついで幼馴染みだからといって、俺だって「礼儀」くらいわきまえている。いきなりショーツの中に指を差し込むようなコトはしていない。

乃の加のピンク色のクロツチ部を「俺にとっては馴染みの縦スジ」に沿って、ゆる、ゆる、と中指でなぞってやっているのだ。

「だ・か・ら・あっ！……マンガに集中できないのうー！」

文句を言いつつも乃の加は股を閉じるコトもしないし、俺の指を跳ね退けるコトもしない。

だから、俺は「そこ」が湿り気を帯びるまで丁寧になぞってやるのだ。

「……んっ………う、んっ………」

乃の加は時々身を振って声を洩らすが、マンガが面白いのかも知れないと思えば俺は

だいぶ湿ってきた。『そこ』に行為を集中する。

「し、しんじい、いっ……だ、ダメ、らってっ……うあんっ♥」

「なんだ、良くないのかっ？」

「よ、好くなんか……んっ、う♪……ない……わよ、う……」

「ああ、そうか……そろそろ、直に触れてっコトだなっ？」

俺は捲れあがったスカートの両サイドから手を入れると、ショーツの横紐を掴んで言った。

「ほれ、パンツ脱がすから腰を浮かせるや……」

「だからあ、そんなコト、言ってないじゃんっ！」

「またも少し怒ったように言いながらも乃の加は微妙に腰を浮かせた。

「口では拒んでも、身体は拒まない……乃の加のそういう性格ってさ……俺は、めっちゃ、好きだぜっ♪」

「それ、『性格』じゃないからっ！」

速攻で突っ込んでくるが、ショーツを足から抜くとまたマンガを読み始めた乃の加の股下はさつきより更に広がっているように見えた。

「しっかし、この紐パン……布面積少な過ぎだろおっ！」

乃の加の足から抜いたショーツを、まじ、まじ、と見ながら感想を洩らすと、相変わらずマンガを読みながら彼女は気にした様子もなく普通に答えた。

「別にいいのうっ！……お外じゃ穿かないからあ……」

その時俺は、ふと、思いついて訊いてみた。

「最近お前、こういうエッチいパンツ多いけどさあ……もしかして乃の加、これってさあ、勝負下着……とかいう、アレかっ？」

「なっ、ななな、な、なに、ひってる、のひょうっ!？」

いきなり飛び起きて俺の手から紐ショーツをひったくった乃の加が真っ赤な顔で睨んでくる。

「へっ？」

何だかこれ程あからさまに動揺した乃の加を見たのは、もしかしたら初めてかも知れなかった。

「……………どうしたんだ、お前っ？」

訳も判らず問い掛けた俺に、乃の加は何かぎこちなく小声で呟いた。

「べ、別に……ど、どうも……し、しない……わ、よう……」

そして、またさっきの位置に身体を横たえた乃の加は少し怒ったように言った。

「わ、わたし、このマンガ、今日中に読みたいんだからね………だ、だから……その……す、スルなら……か、勝手に……どうぞ……」

相変わらずマンガから目を外さずにそう言って後ろ手にスカートを捲った乃の加の股下は更に広がっているようだった。

俺は仕方なく乃の加の股の間に指を挿し込んで（もうかなり濡れていた）弄り始めたが、残念感は強い。

いや、だってそうだろう？ 『スルなら勝手にどうぞ』とか言われても、どうせスルならラブラブな体位でしたいだろう？

——っていうか、俺たち『ラブラブな体位』でした事って……あんまり無い、か？ 恋人関係じゃ、無いよな。でも、エッチはよくしている。

しかし、今みたいに『まぐる』なコトが多いから（っていうか、マンガ読んでるかから勝手にどうぞ……ってナイだろ？）言ってやった事がある。

「お前さあ、俺だから良いが……こんな手抜きなセックスばっかしてると、そのうち相手の男に愛想を尽かされるぞっ？」

すると乃の加は不思議そうに訊き返した。

「えっ？……わたし侑二以外の男子とえっちしたコト無いわよっ？」

「へっ？……そう、なの、か？」

乃の加は良くモテるし、しょっちゅう告られてたし……だから当然、他の男子ともシてると思っていた。

「そうだよ、失礼しちゃうわっ！……まあ、侑二はよく裏庭に呼び出されてたみたいだから、いろんな女子と致してるんでしようけど、ねっ！」

何だか“皮肉”タツプリに感じるのは俺だけか？

（いや、だけどそれこそ誤解だって……あの呼び出しは全部、上級生の強面男子の集団なんだよね……）

「お、俺だって乃の加以外の女子としたこと……な、無い……ぜ……」

「少しか “疚(やま)” しかった”俺は必死に平静を装った。”

「ホントかなあっ？」

胡乱(うろん)げに上目遣いな視線を投げてよこした乃の加は、しかし、少し頬を染めて訊いてきた。

「じゃあ、さ……その……し、シたくなったら……じ、自分で……その、スルのう？」

「んっ？……んんっ？……そういや、俺……自分で……つまりオナニーってしたコト無い、かもぅ？」

「うっそっ！」

即答で否定された。

「ヤリたい盛りの男子学院生が……あ・り・え・な・いっ！」

「いや、確かに毎日のように『ヤリたい』けどさ……そんな時は、お前を呼び出して
るし、さあ……」

「う、嘘だあ……わたし、えっちしようって誘われたコト、無いもんっ！」

「あれ？……んんっ？……そう、だっけ？」

えっと、ムラムラしたら……確か、乃の加にメールで『新しいマンガが入ったから
読みに来いよ』って送ると、直ぐに窓から（俺の部屋と乃の加の部屋は、窓越しに繋が
がっているといっついいい距離だ）やって来て、いつものように俺のベッドに、まるで
誘ってるとしか思えない超ミニスカートで寝そべってマンガを読み始めるから……

……だから、スカートを捲ってパンツの上から丁寧に愛撫してやって……それから、
いつものように寝バックで挿入して……その間、乃の加はマンガ読みながら……時々
悶えて……

——あれえっ？

あの『新しいマンガが入ったから読みに来いよ』ってメール、エッチのお誘いだつた筈じゃ……なかったのか？

えええっ？ 違うのか？

そういや乃の加、来るなり『どれなの？』とか言つてマンガを読み始めるから……俺としては仕方なく読書の邪魔をしないように、そつと後ろから……

えええええっ？

……俺たちの関係って？

——いや、そもそも、こんな関係はいつ頃から始まったんだ……っけ？

昔から乃の加は俺の部屋の俺のベッドでマンガを読んでいた。男女の区別もつかない頃から一緒にいる幼馴染みなんて、どこもそんなモンじゃないだろうか。

初めは本当に他愛のない「じゃれ合い」だった。

マンガを読んでいる乃の加の下半身を軽く触ったり弄ったりしていたのは、まだお互い少年少女と呼べるような頃だったと思う。

しかし、だんだん行為はエスカレートしていった。

足首や脛とかから膝裏へ、擦ったがる膝裏から太腿へ……そして、太腿から股下へ俺の指が進んだのは極々自然な成り行きだったように思う。

そして、お互いの股間の「差異」に興味を持って「熱心な探求」を繰り返したのは、その年齢の少年少女なら当たり前じゃないだろうか。

後になってこれが所謂(いわゆる)「お医者さんゴッコ」だと気づいた頃には、行為は最早戻れないトコロまで進んでいた。

最初は、もしかしたら「強姦」に近い行為だった……かも知れない。

乃の加が泣きながら『痛い』と訴えたが、俺は最早止まれなかった。しかし、乃の加も痛がってはいたが俺の下で俺にしがみついて離さなかったのだ。

いや、そもそも「その行為」は乃の加から求めてきたものだったように思えてならない。

それから、一週間くらい乃の加は俺の部屋に姿を見せなかった。

しかし、更にまた一週間くらい経った頃、ふらりとまた俺の部屋にやってきた乃の加は何事も無かったようにベッドに寝転んで俺のマンガを読み始めた。

いや、しかし——その時、乃の加が選んだマンガは……俺がベッドの下に隠しておいた「あの手のマンガ」だったのだが。

そして、俺が些か距離を置いている（いや、気拙いし）のを感じたのかどうか、乃の加は仰向けになって……あろうコトか膝を立てショーツの中に手を入れて弄り始めたのだった。

そして、教科書を棒読みしてるかのように『あん』とか『うん』とか（いや、あの手のマンガ”を読んでるんだが）言い始める始末だった。

「……………えっと、乃の加さんっ？」

対応に窮した俺は、取り敢えず声を掛けてみた。

すると乃の加は、実にあっけらかんと言ったのだった。

「もう傷も癒えたから……いいよっ♥」

「は、はああ？」

その意味するトコロは、流石に俺でも判った。

——判ったが……俺に、どうしろ、と？

「そろそろしたいんじゃないかと思ってっ♥」

（いや、その語尾にハートマーク飛ばしたみたいな台詞は何だよ？）

「だってさ、侑二のおちんちんも、わたしのおまんこも、お互いに散々弄り捲って舐め捲ってさ……特にわたしなんてさ、おまんこの奥の奥まで懐中電灯で照らされて覗

き込まれて……もう隠す処なんて、無いじゃないっ？」

「……………そ、それ、は……………」

「わたしさ、女子同士のお泊り会の時に……あの懐中電灯の話をしたら全員に引かれちゃったわよう！」

「いや、普通するか、そんな話……………」

「だから、普通の幼馴染みは〃そこまで〃しないそうよっ？」

「……………うっ！」

この微妙に食い違った会話の後、俺は覚悟を決めて服を脱ぎ始めた。

「すっごおいつ♥……………もう、おちんちん、上を向いてるう♥」

俺の脱衣をガン見していた乃の加が嬉しそうに指摘した。

(なんで嬉しそう?)

そして、俺がベッドを軋ませて乃の加の股の間に膝立ちで進むと、彼女が慌てたように口を開いた。

「ああ、そうだ……………今日は……………ううん、今日だけはね、ちゃんとキスから始めて欲しいのう♪」

(今日だけは、って……………まだ二回目のセックスじゃん……………)

——とは思ったが乃の加の思いは何となく理解できた。

俺たちは恋人ではない。これからもそういう関係にはならないだろう。でも俺は乃の加とこれからもセックスはしたいし、彼女も拒まないだろうという気はしている。

だから、今日のこれは「決別」のセックスではない。前回の「強姦」みたいなセックスを「上書き」する為の行為なのだ。

キスから始めるセックスをしよう——つまり、恋人にはならないが、いつかそういう相手ができた時にその行為を肯定できるように「上書き」しておこう、という意味なのだ。それは、乃の加にとっても、俺にとっても、だ。

「それで、乃の加は服を脱がないのか？」

ここはキスだけでなく、お互い裸になって身体を弄(まさぐ)りあい、舐め廻しあつて「恋人セックス」をするトコじゃないのかと思つたのだ。

その俺の言葉に乃の加はかつて見せた事のない艶めかしい表情で言つたのだつた。

「侑二、脱がせたいんじゃないかと思つてえ♥」

(だ、だから……語尾にハートマーク飛ばすなつてっ！)

「ハ、こいつうゝ」

俺は恥ずかしいやら、照れ臭いやらで、わざと恋人っぽい台詞を吐いてブラウスの

第一ボタンから外し始めたのだった。

後で気がついたんだが、乃の加はいつもはノーブラにティーシャツとかだったから寝そべっていてもイロイロ触り易かった。それがこの時はボタンのあるブラウスにブラも着けていた。そして、そういう脱がす為の手順は「かなり興奮」した。

(つまり、よっ？……これって乃の加の計算尽くだったんじゃない……)

そして、お互いの口腔を貪り合うような濃厚なキスを交わしながら最後の一枚を脱がし終えると、乃の加は身体の向きを変えて俺の上に押し掛かってきた。

こうしてシックスナインから始まったその夜の行為は、正常位、後背位、側臥位、騎乗位、立位、ラブラブな対面座位、など、など……お互いに知っていた体位を試しに試し、あまつさえネットで調べながらのアクロバティックな体位まで、気がつけば東の空が白み始めていたのだった。

それが今じゃ——。

俯せで寝転がってマンガを読んでいる乃の加の背後から『寝バック』で挿入させて戴いて(？)一方的に、へこ、へこ、腰を振っている……………。

いや『今じゃ』ではなく、この体位以外をしたのはあの夜だけだ。キスだってあれ

以来、殆んど記憶がない。

良いのか、俺っ！

これで、良いのかつ、俺っ！

(俺だって、さ……俺だって他の女子から告られたり、セックス目当てのお誘いだった何回かはあった、んだぜっ！)

しかし、なあ………。

別に、乃の加に惚れてる訳ではないと思うのだが、他の女子に気持ちちが動いた事がないのだ。

「どうしたの、侑二………シないのう？」

マンガを一冊読み終えて次の巻に手を伸ばした // ついで // のように乃の加が訊いてきた。珍しくこちらを振り返っている。

「勃たないんなら、お口でしてあげようか？」

俺の股間に視線を投げて言ってきた。

ちよつと、あれこれ考え過ぎて俺のチンポはすっかり下を向いていた。

「えっと、それなら……もし、良ければ………ただ………」

「なあにっ？」

「えっと、な……ホント、もし良ければ、だけど……あの、な……マンガを中断して……その、シックスサインで……して、くれない、かな？」

俺は実に「卑屈」をお願い奉った。

だってさあ、前に口でして貰った時のコトが脳裏を過ぎっていたからだ。

確かに口に啜えてくれていた。それに、飴玉でもしゃぶるようにベロも俺のチンポを舐め廻していた。

しかし、だ——。

俺のチンポの横の方でマンガを広げ、横目で読みながらしゃぶられても……

……なあ。

「しよがないなあ……ホントはこのマンガを読みたかったんだけど、久しぶりに、普通のえつちをう、し・ま・す・か・ねっ♥」

乃の加の望外の提案に俺は首を縦に振り捲くって答えた。

（つてか、乃の加もいつもの「普通のエッチ」じゃないと思ってたんだな……）

俺の返事に頷いた乃の加はベッドから降りてタンクトップを脱ぐと、空いたベッド

に顎を構った。

俺も慌てて服を脱いでベッドに仰向けに寝て、乃の加が上に被さってくるのを見詰
めながら感慨ひとしおだった。

よもやこの角度で乃の加のマンコを眺められる日がまたこようとは、俺は胸が熱く
なってしまった。

「侑二つてば、泣いてるのっ？」

俺の上に跨って股の間からこっちを透かし見て乃の加が不思議そうに訊いた。

「な、泣いてなんか、ねえぞっ……それより、ほれ、早くチンポ舐めろよっ！」

「なによ……お願いしますはくっ？」

チンポの先つちよを、ぎゅうっ、と抓られて俺は「卑屈」に訂正した。

「お、お願いします……チンポ舐めてくださいっ！」

「うん、よ・ろ・し・いっ♡」

乃の加は満足気に頷くと、はむんっ、と俺のチンポを啜えたのだった。

——ちゅぷ、ちゅる、ちゅぽっ……ちゅぶっ、ちゅる、ちゅぽっ……くぶっ、くちゅっ
……はふっ、んっ……ぢゅるっ、じゅずずっ、じゅぶう……ちゅぶ、ちゅぶう、ずず
ずう……ずぶぶぶぶっ、ぢゅぶぶぶう、ずるるっ……あん、う……

俺のチンポの弱いところも、俺が喜ぶしやぶり方も、全て知り尽くしている乃の加のフェラチオは速攻で俺の官能を昂ぶらせた。俺も乃の加のマンコに反撃を繰りだしたが、初めから勝負はついていたのだった。

あっさりと彼女の口腔で果てた俺の《思いの丈》を乃の加は音を立てて嚙下してから丁寧にお掃除フェラまでしてくれた。

それから、身体の向きを戻して俺を横抱きにした乃の加は耳元で囁いたものだ。

「ご希望のシックスナインはしたわよう……つぎは、どうするのう？」

あまりの快感に少し息を切らしていた俺を揶揄(からか)うように乃の加が言った。

「少し、休憩するう？」

「ば、バカ言うなっ！」

俺は乃の加の手を掴むとチンポを握らせた。

「やだ、あんなに射精(だ)したのに……侑二ってホント、底無しよねえっ♥」

「あつたりまえだつてのっ！……でもフェラで気持ち良くして貰ったから、次は乃の加の希望の体位でいいぜ……」

「んふっ♥……そ・れ・じゃ・あ……」

乃の加は俺の身体を起こしてベッドの上に坐らせると、股間を跨いで腰を落として

ゆく。それからペニスを握って先端を膣口に啜え込むと、ゆっくり、味わうように呑み込んでいった。

「んんっ……んふう……あん、んう……んふううんっ♥」

膣奥まで、ゆっくり、と時間を掛けて啜え込んだ乃の加は、満足そうな吐息を洩らして言った。

「侑二のおちんちん、やっぱり気持ち好いよう♥」

「何だかその言い方だと他のチンポと比べてるようだぞっ？」

「ばくくくかっ！」

「な、何だよ、その返事はっ！」

「わたしのおまんこは、ま・い・ば・ん、侑二が使ってるじゃないのう♥」

「そ、そういや、そうか……」

俺の鼻の下は少し伸びていたかも、知れない。

「侑二はどうなのよっ？」

「へっ？」

「だから、わたし以外のおまんこ、知ってるのかってコトっ！」

「お、おう……と、当然じゃん……お、男の『嗜み』ってヤツよう……」

俺の胡坐の上で、ゆる、ゆる、と下半身をくねらせながら、乃の加は探るように俺の顔を覗き込んだ。

多分俺が視線を逸らせたのが悪かったのだろう、乃の加は断定的に言いきった。

「なあんだ、知らないのか……」

「い、いや、いや、シッテルって……知ってる、さあ……」

「はい、はい……」

乃の加はもうその件に関して興味を失ったようにエツチに専念し始めた。

俺の肩に両手を置いて腰を上下に振り始めた乃の加は、元々狭隘な膺壁を更に絞めつけながら俺の“相棒”を扱き立てる。

「おおお、すげ、え……絞めつけ……」

「うふうんっ♥」

俺の言葉に自慢気に鼻を鳴らした乃の加は、ぎゅむうんっ、と意識的に膺壁を絞めつけてみせた。

「お前、この体位……ほおう♪……す、好きだよなあ……」

「うん、だって侑二が気持ち好きそうにしてる顔が見れるから……それに、こっちはやっついても、ちゅう、できるしい……」

そう言いながら乃の加は腰の動きを縦運動から回転させるように変えて俺の唇を奪いにきた。

「はむんっ…（ぺちゅ、ちゅろ、ちゅぷっ）…ん、んんう…（ちゅぷ、にちゅ、ちゅぼっ）…ゆうひい、おべろ、らして…（れる、れろう、えろう）…あ、ふう…」

乃の加の希望に答えてやると俺のベロを口腔に咥え込んで舐め廻し、唾液を混ぜ合わせて流し込んできた。

俺はこのままヤラレっぱなしになる訳にもいかないので反撃を開始した。

乃の加の腰の、くびれ、を両手で掴むと下から、ずん、ずんっ、と突きあげた。

「ひいんっ♥…ゆ、侑二い…それ、突きあげるのう…いあん、禁止い！」

快感に身を振って乃の加が俺の首筋にしがみつく。

「ここか、ここが、イイんだろっ？…乃の加、ここだろっ♪」

俺はここぞとばかり乃の加の弱いところを責め始めた。

とまあ、今回の体験版Ver. 01は「二」までです。本篇をご期待戴ければ幸いです。